

國學院大學學術情報リポジトリ

父と子：蘇軾・陸游の詩における「孝」をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 蘇軾, 陸游, 孝, 父子, 血の連鎖 キーワード (En): 作成者: 浅見, 洋二 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000223

父と子——蘇軾・陸游の詩における「孝」をめぐって

浅見洋二

生きかほり死にかほりして打つ田かな（村上鬼城）

中国において「孝」の道德觀念がきわめて重要な役割を果たしていたことは言うまでもない。桑原隲蔵『中国の孝道』の冒頭の一文にも「孝道は中国の国本で、又その国粹である」とある。詩のなかにも「孝」はしばしば表現されている。本稿では、宋代を代表するふたりの文人、北宋の蘇軾（一〇三六—一一〇一）と南宋の陸游（一一二五—一二二〇）の詩を取りあげ、そこに表現された「孝」の性格について、両者を比較しながら若干の考察を加えてみたい。

一 蘇軾と陸游

なぜ蘇軾と陸游とを関連づけて論ずるのか。ただ単に著

名なふたりの文人を無造作に結びつけているだけと見えるかもしれないが、両者を関連づけるには理由がないわけではない。ふたりの詩にはさまざまな点で深く共鳴するところがあるからである。蘇軾を敬愛する陸游は蘇軾から多くを学び、吸収したのだろう。蘇軾詩の表現が陸游詩に継承されたとおぼしき例はきわめて多く見られる。

一例として、ここでは蘇軾「六月二十日、夜渡海（六月二十日、夜海を渡る）」（『蘇文忠公詩合注』卷四三^②）と陸游「初離興元（初めて興元を離る）」（『劍南詩稿校注』卷三^③）とを並べて読んでみたい。蘇軾の詩は次のようにうたわれる。

参横斗転欲三更 参横たわり斗転じて三更ならんと欲す
苦雨終風也解晴 苦雨 終風 也た解く晴る
雲散月明誰点綴 雲散じ月明らかにして誰か点綴せん
天容海色本澄清 天容 海色 本より澄清なり

空餘魯叟乘桴意 空しく餘す 魯叟 桴に乗ずる意

粗識軒轅奏樂声 粗ほぼ識しる 軒轅 樂を奏する声

九死南荒吾不恨 南荒に九死すとも吾は恨まず

茲遊奇絶冠平生 茲の遊の奇絶なること平生に冠たり

參宿は横たわり北斗星はめぐつて深夜になろうとする今、長く

つづいた雨や風もすつかり収まった。雲が消え月が輝き、空に

は何ひとつ妨げるものもなく、天も海も本来の姿を取りもどし、

清らかに澄みわたる。魯の翁（孔子）のように、桴に乗つて海に

浮かび、化外の民を教化しようとしたが、それはかなわぬまま。

しかし、かつて軒轅氏が奏でた古樂の何たるかを、おおよそは

理解できた。南の果てに死にかけたことを恨みはずまい。この

たびの旅のすばらしいこと、わが人生最高のものだったのだから。

晩年の元符三年（一一〇〇）、海南島への貶謫を解かれ北

へと向かつて海を渡るとき作。實際は悲惨極まりない

日々を送ったはずであるが、あえてそれを「奇絶」、素晴

らしき日々であったと言いなす。蘇軾ならではの樂觀主義

が鮮やかに表現された作である。

一方、陸游の詩は次のようにうたわれる。

夢裏何曾有去來 夢裏 何ぞ曾て去來すること有らん

高城無奈角声哀 高城 角声の哀しきを奈いかんともする無し

連林秋葉吹初尽 林を連ぬる秋葉 吹きて初めて尽いき

滿路寒泥蹋欲開 路に滿つる寒泥 蹋みて開かんと欲す

笠沢決婦猶小憩 笠沢 婦らんと決するも猶しほお小憩

わんとす

錦城未到莫輕回 錦城 未だ到らざればかるがる輕しく回かえる莫

かれ

炊菰斫膾明年事 菰まこもを炊き膾なますを斫きるは明年の事

却憶斯遊亦壯哉 却おもつて憶わん 斯の遊も亦た壯なる

哉と

これまで夢にも興元の地を立ち去ろうとはしなかった。高く聳

える城壁から聞こえる角笛つのふえの音の悲しさはいかんともしがた

い。いちめんの木々を埋めつくす秋の葉は風に吹かれて散り果

て、ぬかるんだ路にひろがる冷たい泥を踏み分けて進む。故郷

の笠沢に帰ろうと心に決めているが、しばらくは異郷にとどま

らう。錦城にたどり着かぬままに、あつさり帰るわけにはい

かない。故郷に帰つて菰まこもを炊き膾なますを刻むのは来年のこと。その

とき振り返つて思えば、このたびの旅もまた壮大なものと感じ

られるだろう。

乾道八年（一一七二）、興元府南鄭（陝西漢中）に置かれた

四川宣撫使の幕府が解散となったため、その属官をつとめ

ていた陸游はやむなく成都に向かう。本詩は、そのときの

作。金に支配される北方領土の奪還をめざして憂国の念を

昂ぶらせていた陸游は、いわば梯子をはずされたかっこうとなり、悲嘆や鬱屈を抱えたままに旅立つこととなった。だが、陸游はその悲嘆や鬱屈のなかに打ち沈むのではなく、最終的にはそれを樂觀へと転じてゆく。末句の「斯遊亦壯」は、蘇軾の「茲遊奇絶」を意識しつつ樂觀主義的な感慨を表現したものと見なしていいだろう。

蘇軾以後の宋代の詩には、深淺の差こそあれ、広く蘇軾の影響を見て取れる。杜甫以後の詩のほとんどすべてに杜甫の血が流れているように、蘇軾以後の詩には蘇軾の血が流れている。どこを切つても蘇軾の血が溢れ出すと言つてもいいだろう。なかでも陸游は最も多く蘇軾の血を受け継いだ詩人である。凡庸な詩人であれば見過ごしかねないような蘇軾詩の獨創性を鋭敏に感じ取り、それを自らの詩に積極的に取り入れていったのである。

二 「孝」——父母への敬慕・感謝

蘇軾や陸游の詩に「孝」がどのように表現されているか。ここでは陸游の詩を例に見ておこう。蘇軾ではなく陸游の詩をあげるのは、蘇軾に比べて陸游の方が「孝」を正面から受けとめ、手厚く熱心にうたっているからである。

まず、陸游「寒食省九里大墓（寒食 九里の大墓を省みる）（卷二二）を読んでみよう。紹熙二年（一一九二）、六十七歳の陸游が紹興南郊の九里山にある一族の墓を参拝したときの作である。

陌上簫声正壳錫 陌上 簫声 正に錫を売る
籃輿兀兀雨冥冥 籃輿 兀兀として雨冥冥たり

人來平野一点白 人 平野に來る 一点の白

山庄乱雲千疊青 山 乱雲を圧す 千疊の青

石馬朱門松下路 石馬 朱門 松下の路

凍齋冷飯柳陰亭 凍齋 冷飯 柳陰の亭

華顛尚記兒童日 華顛 尚お記す 兒童たりし日

撫事興懷涕自零 事を撫して懷いを興せば涕自ら零つ

路傍では笛の音とともに水飴が売られている。輿はゆらゆらと揺れ、雨は小暗く降り込める。墓參の人はひとつの白い点となつて遠く野原を歩み、山は幾重にも青を重ねて乱れ飛ぶ雲にのしかかる。石の馬、朱塗りの門、松に覆われた道。凍みた漬物、冷えた飯、柳の蔭の亭。白髪頭となった今も子どもの頃を覚えている。思い出を振り返れば募る思いに胸を衝かれ、涙が知らず溢れる。

末尾の二句において、陸游は子供の頃を思い起こして涙を流している。なぜ、子供の頃を思い起こして涙を流すの

か。それは、自分を産み育ててくれた父母の労苦を思うからである。子としては父母の労苦に報いたいと願うが、しかし今や父母は亡く、それはかなわない。そのため陸游は、父母らが眠る墓の前にして感謝と悔恨の入り混じった涙を流す。本詩が述べるのは、そのような涙である。

同様の涙は、「生日子聿作五字詩十首為寿。追懷先親、泫然有作（生日 子聿五字の詩十首を作りて寿と為す。先親を追懷して、泫然として作る有り）」（卷四八）にも表現されている。嘉泰元年（一一〇一）、七十八歳の生日を迎えた陸游は、末子の子聿（このとき二十四歳）から祝福され、泫然として涙を流す。そのときの感慨が次のようにうたわれる。

我生尚及宣和末 我生ずること尚お宣和の末に及び
 頌曆頻驚歲月移 曆を頻かちて頻りに歲月の移るに驚く
 負米養親無復日 米を負いて親を養うに日を復たびず
 る無く
 蓼我廢講豈勝悲 蓼りくが 講ずるを廢するも豈に悲しむ
 に勝たえんや
 渡江百口今誰在 江を渡りし百口 今 誰か
 抱恨終身祇自知 恨みを抱くこと終身 祇だ自ら知る
 文字虛名何足道 文字の虛名 何ぞ道うに足らん
 樽前媿汝十章詩 樽前 汝の十章の詩に媿はず

わたしが生まれたのはまだ宣和と呼ばれた御代の末年、それから新年の曆が幾度となく下賜され歲月の移り変わりに驚く。もういちど親に食べさせるための米を背負って運びたいと願っても、もはや時はもどらない。父母への思いをうたった「蓼我」について講ずるのをやめたとしても、やはり親の苦勞が思い出されて悲しみに耐えない。長江を渡って南に逃れた我が陸氏一族の百人あまり、いったい誰が生きながらえていよう。一生、後悔の念を抱きつづける胸のうち、自分のほかにわかつてくれる人はいない。文章で得た虚名など、取り立てて言うには値しない。祝いの酒樽を前にお前の十篇の詩を聞かされて恥じ入るばかり。

「負米」一句は、孔子の弟子子路の故事を踏まえる。子路は若く貧しかったとき、親に食べさせようと遠く米を背負って運んだ。その後、出世して生活には困らなくなったが、すでに親は亡く「もう一度、親のために米を背負って運びたいと願っても、それはかなわない」と嘆いた。「蓼我」一句は、晋の王裒の故事を踏まえる。王裒は、弟子たちに『詩経』を講じたとき、小雅「蓼莪」の「哀哀父母、生我劬勞（哀哀たる父母、我を生じて劬勞す）」という詩句に話が及ぶと涙を流した。そのため、弟子たちは二度と「蓼莪」に触れなくなつたという。このように「孝」をめぐるふたつ

の故事をあげたうえで、後半の四句において陸游は、亡き両親を思い起こして感慨にふけり、孝養を尽くせなかつた我が身を羞むるのである。

ここで陸游が亡き父母を思い起こすのは、息子から生日を祝われたことが契機となっている。我が子の自己に対する「孝」に触発されて、自己の父母に対する「孝」に思いをめぐらす。同じことが、遙か遠い過去から繰り返されてきたし、これからも未来にわたって永く繰り返されてゆくだろう。ここに見て取れるのは、言うなれば「孝」の連鎖・連続である。「孝」なる徳目は、世代を超えてつづく連鎖をその本質としている。そして、その連鎖を根源から支えているのが「血脈」すなわち「血の連鎖」である。本詩が、なかば陸游自身の意図を超えるかたちで露わありにしているのは、「孝」道徳を支える「血の連鎖」の根源性であるとも言ってもいいだろう。

三 父と子の光景

——読書する子とそれを見守る父

いま述べた点について考えるためにも、本稿では以下、中国の詩にうたわれた「父と子が寄り添う光景」、特に「子が父の傍らで書物を朗誦し、それを父が見守る光景」をう

たつた詩を取りあげて検討してみたい。

読書する子を見守る父の姿は、近年の日本の映画にも表現されている。『たそがれ清兵衛』の冒頭近く、妻を亡くした貧しい下級武士の主人公井口清兵衛が夜に内職の虫籠作りをしている傍らで、幼い娘が『論語』学而篇を素読する場面がある。そこでの父と娘の対話をあげよう。

娘…子曰のたまわく、千乗の国に道するに、事を敬して而して信、……。

父…いま読んでいるのは『論語』ではねえか。いつからそれを始めたよ。

娘…先月の終わりから。お師匠はんが、これからは、おなごも学問しねばだめだっておっしゃったの。

父…それはええことだ。おれも子供のころ何度も何度も読んださけ、なつかしの。

……(中略)……

父…ほれ、素読つづけれ。

娘…曾子曰く、吾日に三たび、……。

父…吾が身を省みる。

父、途中から娘…人のために謀って而して忠ならざるか。娘が書物を朗誦するのを、父親が傍らで聴きながらいとおしげに見守り、ときには一緒に朗誦する光景。貧しいな

がらも學問に敬意を抱く家庭の暮らしの一齣が表現された
場面であり、我々の多くはここにある種の好ましきを感じ
ることだろう。中国の詩に、このような父と子の光景がう
たわれるのはいつ頃からだろうか。

父と子（息子）が寄り添う家庭内の光景が中国の詩にう
たわれるのは、それほど古いわけではない。そもそも、中
国の文人が自らの子を詩にうたうのは、きわめて稀であつ
た。その種の詩は、おそらく陶淵明の作を嚆矢とする。陶
淵明「和郭主簿（郭主簿に和す）二首」其一には

弱子戲我側 弱子 我が側に戯れ

學語未成音 語を學びて未だ音を成さず

幼子は傍らで遊び戯れ、言葉を話し始めたばかりでたどたどし
く意味もなさない。

とあつて、幼子が自分の傍で遊ぶ光景がうたわれている。

陶淵明の後、自らの子を多く詩にうたつたのは唐の杜甫
である。杜甫「進艇（艇を進む）」には

昼引老妻乘小艇 昼に老妻を引きて小艇に乗り

晴看稚子浴清江 晴るれば稚子の清江に浴するを見る

昼は老いた妻を伴つて小舟に乗り、晴れわたる空のもと幼子が
澄んだ川の水に遊ぶのを眺める。

とあつて、水遊びする我が子を見守る光景がうたわれている

る。

陶淵明や杜甫の詩にうたわれているのは、無邪気に遊び
戯れる子供であつて、読書に勤しむ子供ではない。陶淵明
も杜甫も、官界で成功できなかった文人、つまり読書が実
を結ばなかった文人である。彼らは、自らをかかる脱落者
としてとらえており、それを自嘲的に表現していた。その
意味では、彼らの詩にうたわれる子供が書物を読む子供で
はなく遊び戯れる子供であつたのは、決して偶然ではな
かつたであらう。むしろ、彼らの人生やそのなかで培われ
た心性がそのような子供像を招き寄せたと言うべきかもし
れない。

父親の傍らで幼子が読書する光景。この種の光景をう
たつた最初期の詩人が白居易である。「自詠老身、示諸家
属（自ら老身を詠じ、諸を家属に示す）」は次のようにうたわれ
ている。

寿及七十五 寿は七十五に及び

俸霑五十千 俸は五十千を霑す

夫妻偕老日 夫妻 偕老の日

甥姪聚居年 甥姪 聚居の年

……（中略）……

置榻素屏下 榻を素屏の下に置き

移炉青帳前 炉を青帳の前に移す

書聴孫子読 書は孫子の読むを聴き

湯看侍兒煎 湯は侍兒の煎るを見る

走筆還詩債 筆を走らせて詩債を還し

抽衣当藥錢 衣を抽きて藥錢に當つ

支分閑事了 閑事を支分し了れば

爬背向陽眠 背を爬き陽に向かいて眠る

老いて齡は七十五、俸祿は五十貫。夫婦は長く添い遂げ、甥たちが寄り添つて暮らす。……長椅子を白地の衝立のもとに置き、

火鉢を青い帳の前に持ち出す。孫たちが本を読むのに耳を傾け、

僮僕が湯を沸かすのを見守る。筆を走らせて酬詩の責めを果たし、衣を取り出し質に入れて薬代にあてる。たわいもない雑事

をすませると、背中をかきながら日なたでうたた寝をする。

満ち足りた老後の暮らしをうたうなか「書は孫子の読むを聴く」とあって、幼い孫たちが読書する声に耳を傾ける

白居易自身の姿が描かれている。「たそがれ清兵衛」に描かれていたのは下級武士の家庭の光景であつたが、ここは

エリート士大夫のそれである。このように両者の間には異なる点もあるが、書物に親しむ幼子を好ましげに見つめる

家長の慈愛に満ちたまなざしが表現されている点では共通して

いよう。

このような家庭の光景は、宋代の詩には広くうたわれる

ようになる。蘇軾や陸游の詩にもうたわれており、特に陸

游の詩にはきわめて多くの例が見える。ここでは陸游の詩

句をいくつかあげてみよう。例えば「阻風（風に阻まる）」（卷

一〇）に

欲去不得発 去らんと欲するも発するを得ず

臥対青灯幽 臥して対す 青灯の幽なるに

聴兒誦離騷 兒の離騷を誦するを聴けば

可以散我愁 以て我が愁いを散ずべし

旅路を先に進もうとしても出發できず、寝転んで灯火の青く暗

い炎に向き合う。息子が「離騷」を朗読するのを聞けば、わが

愁いも晴れる。

「燕堂春夜」（卷一八）に

映月疎梅入簾影 月に映ずる疎梅 簾に入る影

読書稚子隔窓声 書を読む稚子 窓を隔つる声

月明かりに映し出された疎らかな梅の影が簾越しに見え、本を読

む幼子の声が窓の向こうから聞こえてくる。

「睡覺聞兒子讀書（睡りより覚めて兒子の書を読むを聞く）」（卷

二五）に

夢回聞汝讀書声 夢より回（かえ）りて汝の書を読む声を聞けば

如聴簫韶奏九成 簫韶 九成を奏するを聴くが如し

夢から覚めるとおまえの本を読む声が聞こえてきた。まるで舜帝の作られた楽曲の完奏を聴くかのよう。

「白髮」(卷二六)に

自憐未廢詩書業 自ら憐れむ 未だ詩書の業を廢せず
父子蓬窓共一灯 父子 蓬窓 一灯を共にするを
あわれにも学問をやめられず、父と子とで粗末な家で灯火ひとつを共にする。

「乞奉祠未報、食且不繼(祠を奉るを乞うも未だ報せられず、食且不繼がざらんとす)」(卷三〇)に

出戸風霜欺短褐 戸を出づれば風霜 短褐を欺りあなど
讀書父子共昏灯 書を読む父子 昏灯を共にす

家を出ると霜を降らせる冷たい風に粗末な短衣をもてあそばれて身は凍えるありさま。本を読む父と子は薄暗い灯火を共にする。

などとあって、我が子が読書するのに耳を傾ける父、我が子と共に読書する父としての自己の姿が表現されている。この種の詩句は、陸游の詩には枚挙に暇ないが、もう一首「与子虞子坦坐龜堂後東窓偶書(子虞・子坦と与に龜堂の後の東窓に坐して偶ま書す)」(卷三七)をあげておこう。本詩は、前半八句に初夏の農村風景を述べたあと、後半八句に

小兒結山房 小兒 山房を結び

窓戸頗疎明 窓戸 頗る疎明

万事不挂眼 万事 眼に挂けず

朱黄浩縱横 朱黄 浩として縦横たり

佳哉東北風 佳哉 東北の風

吹下讀書声 讀書の声を吹き下ろす

功名詎敢望 功名 詎ぞ敢えて望まん

且復慰父兄 且く復た父兄を慰む

年若い我が子は背戸の山に庵を結んだ。窓や戸はひらけて涼しく

明るい。万事に目もくれず、書きつけた朱や黄の墨痕が書物の

あちらこちらを埋める。東北より吹き来る風の何と素晴らしい

ことか、我が子の本を読む声を運んできてくれた。彼が功名を

得るのを望んではいないが、まずは父兄としては心慰められる。

とあって、故郷の屋敷で長男の子虞(このとき五十一歳)、四男の子坦(四十三歳)と寛いでいたとき、末子の子聿(二十一

歳)の書物を朗誦する声が聞こえてきたことがうたわれている。本詩の原注にも「是日午間、聞子聿在山半讀書、相

与欣然(是の日の午間、子聿の山半に在りて書を読むを聞き、相

与に欣然たり)」と述べられる。「功名」を望まないと云っては

はいるが、やはり士大夫の陸游にとつては勉学に勤しむ息

子の姿が嬉しく、また頼もしく感じられたのである。

四「孝」——血の連鎖

前節に述べたことを踏まえ、ここではさらに楊万里「苦吟^⑩」と陸游「初冬雜詠八首」其三（卷七九）とを並べて読んでみよう。楊万里の詩の後半部には

先生苦吟日色晚 先生 苦吟して日色晚れ

老鈴来催喫朝飯 老鈴 来りて催す 朝飯を喫せよと

小児誦書呼不来 小児 書を誦して呼べども来らず

案頭冷却黄薑麵 案頭 冷却す 黄薑の麵

楊万里先生が苦吟するうちに日はすつかり高くなり、老いた使用人がやってきて、早く朝食をすませてほしいと急き立てる。

子供は本を読んでいる最中で呼んでもなかなか出てこない。テーブルのうえ、漬物添えの麵はすつかり冷えてしまった。

とあって、親から「早くご飯を食べなさい」と呼ばれたにもかかわらず読書に耽る子供の姿がうたわれている。前節にあげた詩と同じく、文人である父親の視点から読書に勤しむ我が子の姿をうたった作である。陸游の詩にも

兒時愛書百事廢 兒時 書を愛し 百事廢す

飯冷飯乾呼不来 飯冷え飯乾くも呼べども来らず

一生被誤終未醒 一生 誤るを被るも終に未だ醒めず

老作蠹魚吁可哀 老いて蠹魚と作る 吁哀しむべし

子どものころは書物を愛し、他のもろもろには見向きもしなかった。飯が冷えおかずの肉が乾くのも気にせず読書に耽り、呼ばれても食卓に就こうとはしなかった。わが人生、読書によって狂わされてきたのに眼をさますこともなく、老いて本の紙魚になるなんて、ああ何と哀れな人生であることよ。

とあって、同様の光景がうたわれている。だが、楊万里の詩が父親の視点からうたわれているのに対して、ここでは子供の視点、すなわち陸游が子供だったときの視点からうたわれている。陸游は、父親の視点から我が子の読書する姿をうただけではなかった。子供の視点から、自らが子供だったときに自らが読書する姿を父親から見守られていたことをもうたっていたのである。

いまは父親たる者にも、当然ながら子供時代はあった。いまは父として読書する子を見守る陸游も、かつては子として父の傍らで読書していたのだ。映画『たそがれ清兵衛』の父親の科白にも「おれも子供のころ何度も何度も読んださけ、なつかしの」とあるように。読書する子は、やがては成長して読書する子を見守る父となる。「子が父の傍らで書物を朗誦し、それを父が見守る光景」に表現されているのは、こうして連鎖として繰り返される父子の関係性である。この点について、さらに別の詩を読みながら考えて

みたい。

次にあげる陸游「讀書」(卷四九)には、いま読んだ「初冬雜詠八首」其三と同じく、子供の視点から「子が父の傍らで書物を朗誦し、それを父が見守る光景」がうたわれている。

先親愛我讀書声 先親 我が讀書の声を愛す

追慕慈顏涕每傾 慈顔を追慕すれば涕毎に傾く

万事到前心尽嬾 万事 前に到るも心尽く嬾く

一編相向眼偏明 一編 相い向かえば眼偏えに明らか

なり

致君正使違初志 君を致すこと正に初志に違わしむるも

為己猶当畢此生 己の為にすること猶お当に此の生を

畢うべし

更祝吾兒思早退 更に祝す 吾が兒 早く退かんこと

を思い

雨蓑煙笠事春耕 雨蓑 煙笠 春耕を事とするを

亡き父母はわたしが讀書する声を愛された。慈しみ深いお顔を

思い返すたびに涙がこぼれる。眼の前に生ずるあらゆることが

おつくうに感じられるが、一冊の本に向き合えば眼は思いがけ

ず輝きを取りもどす。大君に貢献しようとの初志はかなえられ

ぬとも、我が身を修めることにこの人生のすべてをかけるがい

い。めでたいことに息子たちは早々と官界を退き、雨のなか簑をまとい、霽のなか笠をかぶり、春の田起こしに励もうとして

いる。

題は「讀書」だが、全体は必ずしも讀書には関係しない。湧き起こる感慨を自由に述べた作となっている(例えば第五六句には「兼濟」の志を果たせぬからには、せめて「独善」にとめよう、という考えが述べられる)。ここでは冒頭の二句と末尾の二句に注目しよう。冒頭二句は言う。自分が子供のとき、父(もしくは父母)は自分が讀書する声を聴くのを喜んでくれた。そのときの父の様子を思い浮かべると、ありがたさに涙がこぼれる、と。そして、末尾二句は言う。いま我が子が早めに官界を退き、田畑を耕そうとしてくれているのは喜ばしい、と。冒頭二句において陸游は、子の視点に立って自分を見守ってくれた父を思い、末尾二句においては、父の視点に立って我が子を見守っている。

ここに見て取れるのは、下図に示したような父子関係の連鎖である。かつては父の子であった自分も今は子の父となり、かつては子として父に見守られていた自分も今は父として子を見守っている。こうした父子関係の連鎖は、先にあげた陸游の「生日子事作五字詩十首為寿。追懷先親、泫然有作」詩にも表現されていた。

父——子

=

父——子

=

父——子

陸游の「生日子聿作五字詩十首為壽。……」詩や「読書」

詩は、いずれも「孝」を主たるテーマとする作品である。

すでに述べたように、「孝」の観念は父子関係という「血の連鎖」によって支えられている。『孟子』離婁上に「不孝有三、無後為大（不孝に三有り、後無きを大と為す）」とあるように、「無後」すなわち父子関係の連鎖が断たれることが、最大の「不孝」である。言い換えれば、「血の連鎖」が維持されることが「孝」にとつての必要条件の最たるものである。これらの詩にうたわれた「父の傍らで子が書物を朗誦し、その子を父が見守る光景」に表現されているのは、過去から未来へとつづく「血の連鎖」としてとらえられた「孝」と言っていいたいだろう。

同様のテーマを表現した作品は、陸游以前の詩にも見られるだろうか。前掲の白居易「自詠老身、示諸家屬」詩にも、老いた家長の傍らで幼子が書物を読む光景がうたわれていたが、賑やかで仲睦まじい家庭の光景の一齣として描

かれるにとどまっておらず、そこには「血の連鎖」としての「孝」観念は必ずしも明確には表現されていない。右にあげた陸游の詩に直接つながってゆくような作として注目されるのは、蘇軾の和陶詩「和陶郭主簿（陶の郭主簿に和す）二首并引」（卷四二）である。第一節にも述べたように、陸游の詩には蘇軾の詩が新たに開拓した表現を受け継いだところが多く見られる。それは「血の連鎖」としての「孝」についても当てはまるだろう。

蘇軾の詩の引には次のように述べられる。

清明日聞過誦書、声節閑美。感念少時、悵焉追懷先君宮師之遺意、且念淮德二幼孫。無以自遣、乃和淵明二篇。随意所寓、無復倫次也。

清明節に息子の蘇過が書物を朗誦するのを聴いた。節回しはとも優雅だった。そこで幼い頃を思い起こしてもの悲しくなり、亡き父君（蘇洵。太子太師を追贈される）の遺志を思い、淮や徳ら幼い孫を思った。それでもせつなさは晴れなかつたので、陶淵明の二篇の詩に唱和することとした。筆の赴くままに思いを託したので、とりとめないものとなった。

元符三年（一一〇〇）、海南島に貶謫されていた六十五歳の蘇軾は、清明節に息子の蘇過（一〇七二—一一三三）が書物を朗誦するのに耳を傾けている。陶淵明の原唱「和郭主

簿」の其一には「弱子戯我側、学語未成音（弱子 我が側に戯れ、語を学びて未だ音を成さず）」とあつて、父たる陶淵明は言葉を学び始めたばかりの我が子が遊び戯れるのを見守っていたが、ここでは我が子の読書する声に耳を傾けているのだ。その息子の声に触発されて蘇軾は、さらに父の蘇洵のことを思い浮かべる。清明節を迎えたにもかかわらず、墓参も果たせずにいることに、罪悪感を覚えているのだろうか。また、蘇軾は幼い孫（淮や徳、長子の蘇邁もしくは次子の蘇迨の子か）にも思いを馳せる。こうして亡き父や幼い孫に思いを馳せるのは、父から自分を経て子や孫へと受け継がれる一族の「血の連鎖」を意識しているからであるだろう。

本詩の其一は次のようにうたわれる。

今日復何日 今日 復た何の日ぞ
 高槐布初陰 高槐 初陰を布く
 良辰非虚名 良辰 虚名に非ず
 清和盈我襟 清和 我が襟に盈つ
 孺子卷書坐 孺子 書を巻きて坐し
 誦詩如鼓琴 詩を誦すること琴を鼓するが如し
 却去四十年 却つて去ること四十年
 玉顔如汝今 玉顔 汝の今の如し

閉戸未嘗出 戸を閉じて未だ嘗て出でず
 出為鄰里欽 出づれば鄰里の欽ぶところと為る
 家世事酌古 家世 古に酌むを事とし
 百史手自斟 百史 手自ら斟む
 当年二老人 当年 二老人
 喜我作此音 我の此の音を作すを喜ぶ
 淮徳入我夢 淮徳 我が夢に入り
 角羈未勝簪 角羈 未だ簪に勝えず
 孺子笑問我 孺子 笑いて我に問う
 公何念之深 公 何ぞ之を念うこと深きと
 今日は何という良き日か、そびえる槐が若葉の陰を広げる。清明の良き日は名ばかりではない。清々しくなごやかな気が我が襟元に満ちる。わが息子は書物を閉じて座し、琴を奏でるかのよう詩を朗誦する。わたしも四十年前も前の昔には、今のお前のように若々しい顔つきをしていた。門を閉ざして外出せず学問に励み、久しぶりに外出すると隣近所の人たちが喜んでくれた。我が一族は代々、古に学ぶ書香の家柄、たくさんの書物に親しんできた。当時、老いた両親は、わたしがおまえのよう詩を朗誦するのを喜んだ。孫の淮と徳が夢にあらわれた。まだ簪も挿せない総角の姿で。息子は笑つてわたしに問う。父上、かくも深く家族を思うのはどうしてでしょう、と。

子の蘇過が詩を朗唱する声を聞いた蘇軾は、かつて四十年前に自分が詩を朗唱したとき、父母がそれを聴いて喜んでくれたことを思い出す。陸游の「読書」詩と同じ光景がうたわれている。それを踏まえてさらに幼い孫を思うことがうたわれるが、おそらく蘇軾は次のように考えているのだらう。いつか将来、自分が蘇過の朗唱を聴いて自分の父母を思い浮かべたように、蘇過もまた一族の子（甥の准や徳）の朗唱を聴いて父である自分のことを思い出すだらうと。本詩がうたう父と子の光景に表現されているのも、過去から未来へとつづく「血の連鎖」としての「孝」である。

つづいて、本詩の其二は次のようにうたわれる。

雀巖含淳音

雀巖 淳音を含み

竹萌抱静節

竹萌 静節を抱く^①

誦我先君詩

我が先君の詩を誦すれば

肝肺為澄澈

肝肺 為に澄澈たり

猶如鳴鶴和

猶お鳴鶴の和するが如く

未作獲麟絶

未だ獲麟の絶と作さず

願因騎鯨李

願わくは騎鯨の李に因りて

追此御風列

此の御風の列を追う

丈夫貴出世

丈夫 出世を貴ぶ

功名豈人傑

功名 豈に人傑ならんや

家書三万卷

家書 三万卷

独取服食訣

独り服食の訣を取る

地行即空飛

地行 空に即きて飛び

何必挾日月

何ぞ必ずしも日月を挟まん

雀の雛は妙なる音色でさえずり、竹の子は清らかな節義を秘めている。我が父君の詩を口ずさめば、この身はまるで澄みわたるかのようだ。鶴の子が親の鶴に和して鳴くかのようであり、麒麟を獲て筆を絶つ（斯文の伝承が途絶える）ような事態には、まだ至らずにいる。願うのは、鯨に乗る李白に付きしたがって、かの風を御する列子を追いかけること。丈夫たる者、世俗を脱するのを望む。功名にこだわらぬなど、傑物とは言えない。我が家の蔵書、三万巻。読むのは仙人の食餌法。地を歩む仙人も、天空を舞う仙人の境地に達しうる。昇天して日月に身を委ねる必要はない。

冒頭の二句には、蘇軾の自注が附されており「此兩句、先君少時詩。失其全首（此の兩句は、先君の少時の詩なり。其の全首を失す）」とある。これによれば、二句は蘇洵の若き頃の作の一部である。全体として、どのような詩であったかは分からない。清純な声で囀る雀の雛、気高い節を備えた筍^{たけのこ}という内容から見て、もとは春の自然をうたった作であるかもしれないが、蘇軾はそれを幼くして士人としての

美質を備えた子供の姿を象徴する詩句として転用しているのではないだろうか。このように解せるとすれば、この幼子の形象には、蘇氏一族の「子供たち」——具体的にはかつて子供であった蘇軾自身や子の蘇過、孫の淮・徳などの姿も重ね合わされていると考えていいだろう。

この其二において蘇軾は、父蘇洵が作った詩を朗誦している。蘇過が詩を朗唱する声に触発されて、蘇軾もまた詩（父蘇洵の作った詩）を朗唱するのだ。其一で、蘇軾はかつて父の傍らで詩を朗唱したときのことを思い起こしていた。其二で父の詩を朗唱する蘇軾は、今は亡き父があたかも身近に存在するかのよう感じていたに違いない。ここでの父蘇洵の詩について、さらに深読みするならば、次のように考えられるかもしれない。このとき蘇軾が朗唱したのは、父蘇洵の若い頃の作である。若き日の蘇洵は、この詩を父（蘇軾から見れば祖父）の蘇序の前で朗唱してみせたのだ、と。つまり、蘇軾がここで思い浮かべているのは、かつて父の蘇洵が祖父の蘇序の前でこの詩を朗唱してみた光景であったとは考えられないだろうか。

いずれにしても「和陶郭主簿二首」は、陸游に先立つかたちで「父の傍らで子が書物を朗誦し、その子を父が見守る光景」をうたい、そこに「血の連鎖」としての「孝」の

永遠性を鮮やかに表現し得た画期的な作品である（其二の後半部には、かかる「孝」のテーマに収まりきれない複雑な要素が含まれているが、それについては第六節に述べる）。近代日本の俳人村上鬼城に「生きかはり死にかはりして打つ田かな」という句がある。先祖代々、そして子々孫々、田畑を耕しつづける農民の「血の連鎖」が底光りする言葉によって表現された、凄みすら感じさせる作である。村上鬼城の句を借りて、蘇軾、そして陸游らの詩の世界を言いあらわすならば「生きかはり死にかはりして詠む詩かな」となるかもしれない。蘇軾や陸游が表現するのは「書香世家」＝読書人の家庭ならではの「血の連鎖」の永遠性であった。

ただし、ひとくちに読書人と言っても、蘇軾と陸游とは若干異なるところがあるのに注意する必要がある。陸游の場合は、前掲の「讀書」詩に「更祝吾兒思早退、雨蓑煙笠事春耕（更に祝す 吾が兒 早く退かんことを思い、雨蓑 煙笠 春耕を事とするを）」とあるように、自らを読書人としてだけではなく農民としての「血の連鎖」を担う者としても認識していた。これには次節にも述べるような、士人でありながらも農民として生きようとした陸游の儒家的農本思想が大きく関わっていたと考えられる。

五 陸游と「孝」——『孝経』、報国、郷紳

蘇軾と陸游は「孝」という道德觀念をどのように見ていただろうか。以下、蘇軾・陸游と「孝」觀念との関係性について思うところを述べてみたい。まずは陸游について、詩を例にあげながら見ていこう。先に陸游について述べるのは、陸游の方が蘇軾よりも「孝」觀念を重視して詩にうたっており、より詳細かつ鮮明なかたちで「孝」との関わり方を示してくれているからである。

陸游と「孝」の関わりについて、まず指摘したいのは陸游が『孝経』を重視していた点である。陸游の詩、特に官界を退いたあとの故郷での田園生活をうたった詩には、『孝経』に言及する例が数多く見られる。例えば「記東村父老言（東村の父老の言を記す）」（卷五五）には

自言家近郊 自ら言う 近郊に家し
生不識官府 生じて官府を識らず
甚愛問孝書 甚だ愛す 問孝の書
請学公勿拒 学ぶを請う 公拒む勿かれ
我亦為欣然 我も亦た為に欣然たり
開卷発端緒 卷を開きて端緒を発す
講説雖淺近 講説 淺近なりと雖も

於子或有補 子に於いて或いは補う有らん
耕荒而黃犢 荒を耕す 而黃犢
庇身一茅宇 身を庇う 一茅宇
勉誦庶人章 勉めて庶人章を読めば
淳風可還古 淳風 古に還るべし

父老たちは自ら進んで言う。「家はまちの郊外にあつて、生まれてから役所のことなど知らずにきました。孝行を説いた書物を読むのをたいへん好んでおります。先生に教えを乞いたく思いますが、どうかお認めください」と。それを聞いてわたしも嬉しく、書物を繕ひもといて話の糸口を示す。つまらないことしか説いてさしあげられないが、貴殿のお役に立てるかも知れない、と。二頭の牛で土地をひらき、茅葺かやぶきの家で身を養う。『孝経』庶人章の教えを熱心に学べば、古の人情厚き世に帰ることができるとのだ。

とあつて、近隣の「父老」（おそらくは陸游と同じ地主層の農民）に向けて『孝経』の要諦を説いて聞かせる様子が述べられる。また、「農事稍間有作（農事 稍や間にして作る有り）」（卷五七）には、秋の収穫を終えた冬の農閑期、子供たちに初等の学問を授けることをうたつて

我方祭竈徹豚酒 我方 祭を祭りて豚酒を徹すれば
盤箸亦復呼隣翁 盤箸 亦復た隣翁を呼ぶ

客婦我起何所作 客婦り我起くれば何の作す所ぞ

孝経論語教兒童 孝経 論語 兒童に教う

教兒童 兒童に教う

莫忽忽 忽忽たること莫かれ

願汝日夜勤磨礪 願わくは汝 日夜 磨礪に勤しみ

烏巾白紵待至公 烏巾 白紵もて至公を待て

臘月の竈の祭を終えて供物の豚肉と酒を祭壇から下げ、皿や箸をそろえて隣家の翁を招く。客人が帰り、さて立ちあがって何をするかといえは、『孝経』や『論語』を子どもに教える。

子どもに教えるのは、ものごとをいいかげんにすませてはいけない、ということ。君たちよ、日夜、自らを磨き鍛えてほしい。

黒い頭巾をかぶり白い麻の衣を着て、公正な科挙試験官を待つがいい。

とあり、陸游が陸氏一族もしくは近隣の子供たちに向けて『孝経』、特にその「庶人章」を講じていたことが述べられている。

また、陸游は近隣の民に向けて『孝経』を説いただけでなく、自分自身にも説いて聞かせていた。「自詠」(巻六六)には、自らの農村での暮らしぶりをうたうなか、末尾の二句に

士章八十字 士章 八十字

世世写屏風 世世 屏風に写さん

『孝経』士章の八十字、子々孫々、屏風に書き記して伝えていこう。

とある。本詩に附す原注にも「予写孝経士章八十字為屏風(予 孝経士章八十字を写して屏風と為す)」とあって、陸游が『孝経』の「士人章」を写して座右の銘としていたことが述べられる。

こうした作品からは、陸游が『孝経』を重視しており、その教えを自らの生活実践の規範としていたことがわかる。中国の士人にとって、『孝経』のような儒家経典を重視するのは極めて当然のことであるが、陸游ほど熱心にそれを詩にうたった文人は他に例を見出し難い。

なぜ陸游はこれほど熱心に『孝経』について語ったのか。陸游の『孝経』重視に関連して、次に指摘したいのは、それが陸游の「報国」「報恩」すなわち宋王朝・皇帝から受けた恩に報いようとする志向と強く結びついていた点である。例えば「自詠絶句八首」其一(巻六六)には

双鬢蕭條失故青 双鬢 蕭條として故青を失うも
躬耕猶得養餘齡 躬耕 猶お餘齡を養うを得たり
明時恩大無由報 明時 恩大にして報ゆるに由無し
欲為郷鄰講孝経 郷鄰の為に孝経を講ぜんと欲す

両の鬢は衰えてかつての黒さは失われたが、自ら耕せば残りの人生も何とかやっていける。聖明の世、御上よりいただきたいご恩は大きく、お応えすることもできないが、せめて故郷の村人たちのために『孝経』を講ずるとしよう。

とあつて、官界を退いた今、仕官によつて皇帝の恩に報いることがかなわぬからには、せめて近隣の民に『孝経』を解説することで皇帝の恩に報いようという考え方が述べられている。『孝経』が説く「孝」は「忠」の道德観念と表裏一体の関係にあつた。『孝経』士章に「資於事父以事君。……以孝事君則忠（父に事うるに資りて以て君に事う。……孝を以て君に事うれば則ち忠なり）」などとあるように。つまり、「孝」を修めることは、君主への「忠」を実践することにも通じていたのである。陸游ら宋王朝に仕える士人たちは、国家の統治に役立つものとして『孝経』をとらえ、またそれを活用していたのである。

『孝経』の活用の具体的なあらわれのひとつが、近隣の民に向けての『孝経』を用いた説論であつたと考えられる。陸游と同時代の朱熹（一一三〇—一二〇〇）には「示俗（俗に示す）」と題する文章がある。これは一種の「勸農文」「諭俗文」である。宋代には、農民の教化のために地方官が「勸農文」「諭俗文」を發布した。⁽¹⁵⁾ 陸游も地方官をつとめたと

きに「勸農文」を書いている。朱熹「示俗」⁽¹⁶⁾には

『孝経』云、用天之道、因地之利、謹身節用、以養父母、此庶人之孝也。以上孝経庶人章、正文五句、係先聖至聖文宣王所説。奉勸民間、逐日持誦、依此経解説、早晚思惟、常切遵守。……（後略）……

『孝経』に言う。「天の道を用い、地の利に因り、身を謹み用を節し、以て父母を養う。此庶人の孝なり」と。以上は『孝経』庶人章の正文五句であり、先聖にして至聖なる文宣王（孔子）の説かれた言葉である。民間の人々に向けて、日々これを誦し、この經典に則つてももの道理を説き、朝に夕に思いめぐらし、つねに我が事として守るよう勧める。……

とあつて、『孝経』の庶人章をそのまま引用したうえで解説を加えている。『孝経』の教理が庶民の統治に資すると考えられていたことがうかがわれる。官界を退き農村に暮らす陸游もまた、これと同様の考え方のもとで近隣の民に『孝経』を説いていたのであり、またそのことによつて国家の統治に貢献し、国家の恩徳に報いようとしていたと考えていいだろう。

官界を退いた後の陸游の田園詩には、いま述べたような「報国」の意識が、繰り返し表現されている。例えば「記老農語（老農の語を記す）」（巻五五）に

雖然君恩烏可忘 然りと雖も君恩 烏ぞ忘るべけんや
為農力耕自其職 農と為りて力耕すること 自ら其の

職なり

百錢布被可過冬 百錢の布被 冬を過すべし
但願時清無盜賊 但だ願う 時清にして盜賊無きを

とはいえ（農耕の暮らしは苦しいとはいえ）、大君の御恩は忘れられない。農夫として耕作に励むことこそ、我らのつとめ。百錢の安い木綿布団があれば冬を越せる。ただひたすら願うのは、世が平和で盜賊に襲われぬこと。

「晨起」（卷六五）に

老已忘開卷 老いて已に卷を開くを忘れ

貧猶力灌園 貧しきも猶お園に灌ぐに力む

兒孫能繼此 兒孫 能く此を継げば

亦足報君恩 亦た君恩に報ゆるに足る

年老いてもはや書物を繕くのは忘れ、貧しいけれども畑に水をやるのに勤しむ。子や孫たちがこれを引き継いでくれれば、大君の御恩にお応えすることにはなるだろう。

「秋日村舎二首」其二（卷七三）に

村村婚嫁花簇檐 村村 婚嫁 花 檐に簇がり

廟廟禱祠神降語 廟廟 禱祠 神 語を降す

兒孫力稼供賦租 兒孫 力稼し 賦租を供し

千年万年報明主 千年 万年 明主に報いん
あちこちの村で嫁取り嫁入りが行われて荷籠に祝いの花がふれ、そここの社で祈りが捧げられて神のお告げが下る。子や孫たちは懸命に働いて年貢を納め、千年万年にわたって英明なる天子の御恩に応えてゆくことだろう。

などとあつて、農耕に勤しみ、その成果を税として国家に納めることで、国家から受けた恩徳に報いたいとの思いが表明されている。なお「記老農語」詩は、近隣の農民の言葉を記すという体で書かれているが、おそらくそこには陸游自身の思いも重ねられている。「老農」とは陸游自身を指すと解してもいいだろう。

陸游の「孝」の理念は、右に述べたような「報国」「報恩」の意識と連動していた。そのことを端的に示す例として、「示兒子（兒子に示す）」（卷四二）が次のようにうたうのをあげてもいいだろう。

禄食無功我自知 禄食 功無きこと我自ら知る

汝曹何以報明時 汝曹 何を以てか明時に報ゆる

為農為士亦奚異 農と為り士と為るは亦た奚ぞ異なら

んや

事国事親惟不欺 国に事え親に事うるは惟だ欺かざれ

道在六経寧有尽 道は六経に在りて寧くんぞ尽くる有

躬耕百畝可無飢
らんや
躬ら百畝を耕せば飢うること無かる

べし

最親切処今相付 最も親切なる処 今相い付せん
熟読周公七月詩 周公 七月の詩を熟読せよ

禄を食みながらも功をあげていないのは自分でもわかつてい
る。おまえたちは何によって英明なる御世に應えるのか。農夫
であるのと士人であるのと、何の違いがあるうか。国家に仕え
父母に仕えるのに重要なのはただひとつ、欺かないこと。守る
べき道は六経に書き記されていて尽きることはなく、この手で
百畝の土地を耕せば飢えることはない。最も肝心な訓えをいま
授けよう。それは周公の「七月」の詩を熟読することだ。

第六句の「百畝」は、周公が定めたとされる理想の土地
制度である井田制をあらわす語であり、第八句の「七月」
は周公の作とされる農耕生活をうたった『詩経』豳風の篇
名である。ひとことでは言え、本詩は、儒家の農本思想を宣
揚する作である。そのなかで第二句には「何を以てか明時に
報ゆる」とあつて「報国」への願望を表明する。そして、
ここではその願望が、第六句に「国に事え親に事うるは惟
だ欺かざれ」とあるように、「忠」と一体化した「孝」の
理念と結びつけられているのである。本詩は、中国の士人

であれば誰もが賛同する儒家思想のスローガンを、あられ
もなくつなぎ合わせたような作となっている。ここに浮か
びあがってくるのは、儒家の伝統的なイデオロギーを愚直
に信奉する儒家原理主義者とも呼ぶべき知識人の肖像では
ないだろうか。

「孝」をはじめとする儒家イデオロギーの信奉者である
陸游は、故郷の農村社会のなかでどのような方をして
いたのだろうか。ひとことで言うならば、官界を離れてなお
「士」の意識を抱く郷村の指導者となるだろう。これをさ
らに「郷紳」すなわち「在郷の縉紳」と呼んでもいいかも
しれない。社会制度のなかに「士」としての身分を組み込
まれた狭義の「郷紳」が歴史に明確な姿をあらわすのは明
清期であるが、南宋期にはすでにそれに近い地域社会（基
層社会）のエリート層が生まれつつあつた。陸游は、その
先駆的な存在であつたと考えられる。

陸游の田園詩には、「郷紳」と呼ぶにふさわしい陸游の
人物像が少なからず表現されている。例えば「春社有感、春
社 感有り」（卷二七）には、官界を退き農村に暮らす自身
の姿を

耆年凋落還堪嘆 耆年の凋落 還た嘆くに堪えたり

社飲推排冠一郷 社飲の推排 一郷に冠たり

村の長老が亡くなられたのは実になげかわしい。村の寄り合
いの宴席では、わたしごときが一番の上座かみざに坐らされるように
なった。

とうたつている。村祭りの酒宴の席次が最上座になつたこ
とを述べたもの。本詩に附す原注には「三山、百家之聚、
年莫余先者（三山、百家の聚、年 余に先んずる者莫し）」とある。
「三山」は陸游が暮らす紹興郊外の村の名。陸游が三山の
鄉村社会に溶け込み、周囲の信頼を得ていたことがうかが
われる。

また「三山卜居、今三十有三年矣。屋陋甚而地有餘、数
世之後、当自成一村。今日病少間、作詩以示後人（三山に
卜居すること、今三十有三年なり。屋陋なること甚しきも地に餘り
有り、数世の後、たまに自ら一村を成すべし。今日病少しく間なれば、
詩を作りて以て後人に示す）」（卷三八）には、やはり官界を退
いて農村に暮らす喜びをうたうなか

数椽幸可伝子孫 数椽 幸いに子孫に伝うべくして
此地它年名陸村 此の地 它年 陸村と名づけられん
藜羹一飽能世守 藜羹 一飽 能く世よよに守れば
殊勝養牛并上尊 殊ことに勝らん 養牛なら并びに上尊に
幸いなことに、数軒の家を子孫にのこせて、いつかこころが陸氏
の村と呼ばれば、じつにうれしい。粗末なスープでも腹を満

たす暮しがかなえば、上等な牛肉と酒の贅沢にも勝るだろう。
とあつて、陸氏一族が三山の鄉村を代表する一族であるこ
とが述べられている。右にあげた二首からは、もとは進士
出身の官僚でありながらも、在郷の地主（言い換えれば「父老」）
として、鄉村社会に深く根を下ろしていることへの自負・
自信すら感じ取れる。

陸游が「孝」の理念を篤く奉じながら「報国」を目指し
て農耕に勤しみ、納税を怠らなかつたのも、こうして鄉村
社会の指導者としての自覚に支えられていたからであろ
う。先にあげた「自詠」詩には「十章八十字、世世写屏風
（十章 八十字、世世 屏風に写さん）」とあつて、『孝経』を奉
ずる自らの暮らしについてうたつていたが、本詩には

租税先期畢 租税 期に先んじて畢おえ
陂塘與衆同 陂塘 衆ともと同じす

税は期日より前に完納し、ため池は皆と一緒に利用する。

という詩句も見える。在郷地主として納税の義務を果たし、
地域の農民との協働にも積極的に参画していることを述べ
たものであるが、ここに表現されているのはまさしく鄉村
社会の指導者としての陸游の自画像である。そして、かか
る指導者としての陸游の生き方の規範・指針となつていた
のが『孝経』の教理であつた。陸游の「孝」は、鄉村の指

導者としての安定した暮らし、そのなかで得られた確固たる自負によって支えられていたのである。

六 蘇軾と「孝」——超俗、社会的基盤の喪失

蘇軾の場合、「孝」に対してどのような関わり方を示していただろうか。陸游と比較しながら考えてみたい。

蘇軾と「孝」との関連を考えるうえで注目してみたいのは、第四節にあげた「和陶郭主簿二首」其二である。先ほども述べたように、本詩には「血の連鎖」としての「孝」が表現されている。陸游の場合は「孝」の道徳に全身全霊を捧げていたと言ってもよく、ときには「孝」の尊さに心を揺さぶられて涙を流すことさえあったが、蘇軾の場合はどうだろうか。あらためて本詩の言葉を読んでみよう。本文と書き下し文のみ、再掲する。

雀巖含淳音 雀巖 淳音を含み

竹萌抱静節 竹萌 静節を抱く

誦我先君詩 我が先君の詩を誦すれば

肝肺為澄澈 肝肺 為に澄澈たり

猶如鳴鶴和 猶お鳴鶴の和するが如く

未だ獲麟絶 未だ獲麟の絶と作さず

願因騎鯨李 願わくは騎鯨の李に因りて

追此御風列 此の御風の列を追う

丈夫貴出世 丈夫 出世を貴ぶ

功名豈人傑 功名 豈に人傑ならんや

家書三萬卷 家書 三万巻

獨取服食訣 獨り服食の訣を取る

地行即空飛 地行 空に即きて飛び

何必挾日月 何必必ずしも日月を挾まん

冒頭の四句は、蘇軾が父蘇洵の詩句を朗誦したことを述べ、つづく第五句「猶お鳴鶴の和するが如し」は、父の詩句を朗誦する自分の声を、親の鶴に和して鳴く子の鶴の鳴き声に重ねて述べる。第六句「未だ獲麟の絶と作さず」は、こうして父の詩句を朗誦することで、蘇軾一族の家学である「斯文」の伝統が途切れずに継承されたと言ったものだろう。以上、前半の六句は、士人＝知識人の一族である蘇氏の「血の連鎖」を表現したものとなっている。では、第七句以降の後半部についてはどうだろうか。一読して、後半部には前半部と方向を異にする表現がなされており、作品としての統一が失われているかに見えるかもしれない。本詩の引に「意に随いて寓する所なれば、復た倫次無し」と述べるのは、このあたりの不統一を指して言ったものだろうか。

第七く十句において蘇軾は、李白や列子の後を追いかけて、功名を求めて齷齪する世俗を抜け出したいと言う。そして、更に第十一く十四句では、家蔵の書物のうち、特に仙人になるための養生法に関する書物を選んで読み、仙人をめざしたいと言う。第六句では、家学である「斯文」すなわち儒家思想の継承を語っていた蘇軾であるが、詩の後半部に至っては「斯文」の枠組みを逸脱して、仙界への志向を語るうとするのである。本詩の前半部には「血の連鎖」に支えられた儒家的な「孝」観念がうたわれていたが、蘇軾の奔放にして闊達な思想はその枠組みを超えてゆく。「血の連鎖」としての「孝」は、蘇軾のような自由奔放なる精神の持ち主にとっては、自由を縛る「鎖」でもあったのかもしれない。この点、あくまでも儒家的な「孝」観念の枠内に留まる陸游の思想との間に根本的な差異を示している。ここには、儒家原理主義者たる陸游とは異質な、蘇軾ならではの自由奔放な思想があらわれていよう。これについては、どのように考えるべきだろうか。

陶淵明の原唱「和郭主簿」詩の其一には、前掲の「弱子戯我側、学語未成音（弱子 我が側に戯れ、語を学びて未だ音を成さず）」句につづけて「此事真復楽、聊用忘華簪（此の事真に復た樂し、聊か用て華簪を忘る）」とあって、「華簪」＝世

俗を忘れ去ろうとする意思を述べる。また、同詩の其二には、秋のすがすがしい景色をうたうなか「芳菊開林耀、青松冠巖列（芳菊 林を開きて耀き、青松 巖に冠して列ぬ）」と菊や松の超俗的な節操をうたつたうえで、それを体現する「幽人」＝隱者の生き方への憧れを述べている。蘇軾の次韻詩「和陶郭主簿二首」其二の後半部が示す思想的自由奔放さには、こうした陶淵明の思想への応答といった性格を見て取れるかもしれない。だが、果たしてそれだけだろうか。

第五節に述べたように、陸游の人物像には郷村社会の指導者という側面があった。陸游は、地域の名族として郷村社会に安定した基盤を築いており、またその基盤のうえに立って「孝」や「忠」を尽くすことができたのである。ところが、言うまでもなく蘇軾は、そのような安定した社会的基盤を有していない。朝廷を逐われ、故郷を離れて、遠く南方の地に貶謫された蘇軾にとっては、そもそも身を安んずるに足る共同体、すなわち国家や郷村社会など存在しなかったのだ。国家や郷村社会どころか、家族＝家庭さえも完全な形では存在しておらず、身を安んずる場とはなり得なかった。家族があちこちに離れ離れの状態で分散して暮らしていた蘇軾には、陸游のように一族郎党そろって故郷の村に暮らせる安らぎなど望むべくもなかったのである。

る。こうして、さまざまな社会的基盤を欠いた状態で暮らさざるを得なかった蘇軾には、陸游のように「孝」に対して全身全霊を捧げられるような条件は十分に備わっていなかったと考えられる。「和陶郭主簿二首」が其二の後半部に至って「孝」からの逸脱を表現する思想的自由奔放さの背後には、このような事情を想定してもいいだろう。

その意味では、蘇軾の思想の自由奔放さとは、「孝」觀念に身を捧げるに足る社会的基盤を奪われていた蘇軾が、その欠落を埋め合わせるために作りあげたものであったと考えざるべきかもしれない。蘇軾の超俗的な自由奔放さについて、我々はそれを文学的な美質として称賛する。だが、その奥底には自らの存在基盤を奪われた者の苦渋や悲哀がつねに蟠^{わだかま}っていた可能性がある。この点に思いを致す必要があるだろう。

注

(1) 講談社学術文庫、一九七七年。初出は一九二七年。

(2) 以下、蘇軾詩の引用は馮応榴輯注、乾隆年間桐鄉馮氏踵息齋刊

本『蘇文忠公詩合注』（中文出版社、一九七九年影印）により、

題下に卷数を附す。

(3) 以下、陸游詩の引用は錢仲聯校注『劍南詩稿校注』（上海古籍出

版社、一九八五年）により、題下に卷数を附す。

(4) 「血の連鎖」は生殖という動物的・生物的な営みによって支えられる。「孝」は、人に備わる動物的・生物的な性格に支えられた道徳観念であり、その意味で「仁」や「忠」などの他の徳目とやや異なっていよう。この点を視野に入れた「孝」研究の代表的な成果として加地伸行氏の一連の論著があげられる。例えば『加地伸行著作集Ⅲ 孝研究——儒教基礎論』（研文出版、二〇一〇年）前篇第一章「孔子における愛と死と（孝）」と——中国における宗教思想の一前提」、同上第三章「曾子と『曾子』学派と」（ともに初出は一九六四年）は、「親子」という「不合理的な」「生物的關係」としての「血の鎖」が形作るものを「孝的原質」あるいは「零次的孝」と位置づけて論じている。

(5) 監督山田洋次、脚本山田洋次・朝間義隆、原作藤沢周平、松竹、二〇〇二年。

(6) 引用の脚本は浅見が映画から文字に起こしたものである。なお、この対話は藤沢周平の原作には見えず、映画独自の脚色である。また、引用を省略した部分には女子にとつての学問の意義をめぐる対話が交わされる。映画においては重要な意味をもつ対話であるが、ここでは割愛する。

(7) 袁行霈撰『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）巻二。

(8) 仇兆鰲注『杜詩詳注』（中華書局、二〇一五年）巻一〇。

(9) 朱金城箋校『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年) 卷三七。本詩の存在は澤崎久和氏に教えられた。

(10) 辛更儒箋校『楊万里集箋校』(中華書局、二〇〇七年) 卷一〇。

(11) 『靖節』は「靖節」に作るテクストもある。和陶詩であることから、意図的に陶淵明の諡たる「靖節」を用いたか。

(12) 陸游の農本思想については、拙論「陸游詩中の田園与国家」以《耕織図詩》及勸農文、論俗文為線索」(衣若芬主編『五声十色・文図学視聽進行式』文図学会、二〇二二年)、および「土」と「農」、『勸農』と『躬耕』——陸游とその田園詩について」(『アジア遊学』二七七、勉誠出版、二〇二二年) に若干の私見を述べた。

(13) 陸游と「孝」との関連については、注12所掲の拙論をあわせて参照。

(14) ここは「冬学」と呼ばれる農閑期の子供向けの学校で教鞭を執ったことを述べたものか。陸游には「冬学」の教師をつとめることをうたった作「秋日郊居八首」其七(卷二五)があり、詩に附す原注には「農家十月乃遣子入学、謂之冬学、所說雜字・百家姓之類、謂之村書」とある。あるいは、陸氏一族の子弟に向けて初学を講じたとも解せるか。

(15) 宋代の「勸農文」「論俗文」については主に宮沢知之「南宋勸農論——農民支配のイデオロギー」(中国史研究会『中国史像の再構成——国家と農民』文理閣、一九八三年)、小林義廣「宋代の再

『論俗文』」(宋代史研究会『宋代の政治と社会』汲古書院、一九八八年)などを参照。

(16) 『宋文公文集』(『四部叢刊』本) 卷九九。

(17) 『郷紳』については主に奥崎裕司「中国郷紳地主の研究」(汲古書院、一九七八年)、劉子健著・梅原郁抄訳「劉宰小論——南宋一郷紳の軌跡」(『東洋史研究』第三七卷第一号、一九七八年)、寺地遵「湖田に対する南宋郷紳の抵抗姿勢——陸游と鑑湖の場合」(『史学研究』第一七三号、一九八五年)、濱島敦俊「民望から郷紳へ——十六・七世紀の江南士大夫」(大阪大学大学院文学研究科紀要』第四一卷、二〇〇一年)、寺田隆信「明代郷紳の研究」(京都大学学術出版会、二〇〇九年)などを参照。特に寺地氏の論考は陸游を明確に「郷紳」と呼んでいる点で重要である。

【附記】本稿は、國學院大學中國學會第六五回大会(二〇二二年一月二三日、於國學院大學)にて行った公開講演にもとづく。石本道明会長をはじめとする同会の先生方のご教示に深く感謝する次第である。

〔キーワード〕蘇軾、陸游、孝、父子、血の連鎖